

雨 も り

『遂々降って来やがった!』

お繁はふっと目を開けた。襖を隔てた父の呟きが迫らず、重い髪であつたゞけに、静寂の底深く沈んで行つて、それがやがて澱んだやう、家のうちは殊更に森閑となつた。種々な追懐の渦に巻かれて、いつとはなしに我を忘れかけて居たお繁の耳に、淋しい雨の音が屋根を打って響いて来る。降るものとは今朝からの空模様でも知れたが、庇に蔽さる柿の梢を吹いて、バラバラと一際強く雨戸を叩く音を聞いて居ると、旅に出た夜のやうに、頼りない思ひが、静かだ、寂しい、といふ情緒をそゞりたてる。目を据ゑて、雨の外の物音を聞かうとしたが、閉て合へた室の闇に吸ひ込まれるやうに、雨は益々強まる許り、無意識に両手で確と押へて居た乳の暖が軀に傳つて、どきりどきりと動悸の高いのが知れる。未だ宵らしく、襖の隙間が、闇に細く光の線を劃いて居るが、爐傍の父は何を仕て居るのか、芋の莖の皮をむいて居た母の仕事も終へたのか、ことりとも、すうとも音がなく、氣味の悪るい程静かなのにお繁の目は冴えて來た。身動げば括り枕のがさつくのも怪しい。鎮守祭の時いつも招ばれて來る川下の伯父が、眞赤な顔をしてたわいもなくエへエへ笑ひながら母に小言を言はれ言はれくるまつて寝た。此家の一つの客蒲團、それを母は出してくれたが、この夏も風に觸れなかつたか、長らく納戸の底に潜んで居た濕氣臭さは、動く度に鼻をついて、忘れてはつと引き披ぐ襟元が頬に冷たい。

お繁は一寸顔を擧めて仰向けになつて、足に力を入れて蒲團を引くと、ひいやりとした氣が肩先に侵みる。ほうと、息を吹いて、目を据ゑて居るうちに、篠つくやうな雨の音は漸々頭腦に朧ろになつて來る。お繁は靜動として我と我がする鼻息を聞いて居た。

『つまらないな』と臆て我知らず口の中に出る。たゞつひさう口に出たのだ。また横になつて枕をぐいと引き寄せて、そのつまらないと思ふやうなことを考へる。華やかな都の風物がパノラマのやうに頭の中にひらいて來た。一々それを辿つて見て行くうちに、都離れたお邸宅の四圍の寂靜が偲ばれてくる。松の多い庭園に洩れる奥の笑ひ聲が耳の底に響いて來た。氣の揉めるやうな胸を抱いて、お繁はまた寝返つた。

乗り出してからは、遠に故郷懐かしさの念に充されて居たが、空合も怪しければ荷物も多し、只一輛残つた車を雇つて二里を歸つて見ると、嘘言とは充分に悟りながらも、猶氣に掛らぬでもなかつた父が、けろりと爐邊に煙管を叩いて居たのが腹立たしかつた。奉

公もいゝ位にして歸れ、の次は父が病氣今まで知らせずに置いたが餘り好い方でもないとの書簡、奥ではそれを眞實にして兎も角も歸國つて見よとお暇が出る。嘘だ、口實だとは思ひながら、歸つて見たくないこともなく、歸ることは歸つた今日、故郷はどこか懐かしけれど、また東京は戀しい。

『郷！ 汝あお午つから栗拾ひに行つて來うや、晩に栗飯焚くからな』と母は、珍らしい姉の容子をじろじろ見て居る郷一に三杯目を盛つてやりながら言ひつけると、『ん』と茶碗を搔つ手繰つてかつかつ搔き込んで居る。

『東京ではねおつ母さん、栗はあるけれどもそれは高價いんですよ、一升三十錢も四十錢もするんだもの馬鹿々々しいつたらありませんよ、その代り綺麗だけれど、一粒選りで』とお繁は箸のまゝ鬢の後れ毛を搔きあげる。

『ふーむ、なんでもさうなんだつぺでな』と母は感心する傍から、

『今年は駄目だ！』と父はぼつりとした語をはさむ。

『外づれ年は甘味も薄いで、此三年ははづれてばかり居るものな、追々樹も少なくなんだつぺで』箸を置くと、

『私が若い頃なんぞ、朝早くさ行けばかますに一つ位造作もなく拾ひたものだつ』と母は昔を語る。

『毎晩だつねえ！』と栗の團欒の夜を思ひ出してお繁も、ふと爐を見ると、竹自在に眞黒く煤けて居る大鐵瓶の尻高く、燃えさしの木の根が、細い白い煙りをたてゝ燻つて居る。

その圍に、眞つ黒い干乾びた茸が、串に刺されて植ゑ並べられてあるのを見ると、肩曲りの二升焚き鍋が沸々と煮えたつて、時々其白い泡が流れてはちふーんと火が消えてしまふ。それを涙の目でこすりながらふうふう吹いて、其火影で讀本の復習もした、昔の自分のそけ髪が懐かしく床しく思はれて來る。黙り込んで箸を置くと、

『それつきりか、東京さ入つて少食になつたな』と傍から母が笑つて言ったが、

『あ、郷一！ 序でにな、時兄ちや家さ寄つて東京の姉ちや今日歸つたぞいつてさう言つてげや——』と、藁草履をつつかけ、すたすた裏口からはげごをさげて出て行く郷一に大聲をかける。

時、といふ語にふと胸を打たれて、お繁は暫と母の顔を見た時、

『おや時さ——』と筒抜けた聲を出されたので、吃驚して振り向くとそこには山仕度の時三が、それも不意を打たれた形でつたつて居る。

『今、何、郷にさう言つてげつて言つてやつたところだった、お繁が今少時前歸つたでな

い——まあ上らっせ、時さ』

母は大きな聲を出して莞爾にこついて居る。

『時さんどうも久濶しほろく、あの伯母さんはどうして？』

お膳を片づけるとて袂を帶留にはさんだまゝ、もの馴れた口調でお辭儀をすると、

『は、何に——』と時三は氣の毒な程眞つ赤になって、正直らしく疊に手をついた。

『あんまり快い方でも無えでな——困ったものよ』と父が重い口で代ると、

『年中だアから——』と瞥ちらとお繁を見やつて瞥と目を外そらす。

お繁はふと、矜ほこらしい胸を張って、立ち上りざま

『困るわねえ——こちらは滅切寒いのね』と就かぬことを言ひ乍ながら、

『まあ上つたらいゝでせう』と弟を待遇あしちふやうな氣持ちになつて言つた。

その心持ちがある。二三年前から見えて居た、時三を婿にといふ親達の心と、今度こそありありと読み得たが、それを思ひ出すと、情けないやうな、笑つてやりたいやうな、擦くすくつたいやうな感じがする。

『ほんにちつともすれない、堅い奴だて——感心に』と逃げるやうに歸つて行く時三の後見送あとつて、お繁を振り向いて莞爾にこした、先刻母親の顔がふと泛んで來た。馬鹿々々しい、と腹立たしげにそれを拂ひ退けようとしたが、ふと自分に丸鬚を結はせて時三を假かりに家の人にして見る。袖のある着物を着たところが、

いかにも田舎じみて、手片てきがひよるながくつて、黒くつて、そして顔はどこまでも子供じみて居る。

『誰れが！』と口に出して言つてお繁は蒲團を冠かぶつた。

とまた凝乎じつとして、丸鬚に手拭を冠かぶつて、赤い袴たすきをかけて、裾はしを端折しをつてと出来るだけ自分の姿を美しく想像えがいて見やうとした。するうちに、稲刈りやら、豆擲まめがちやら、秋纏あきまとひの忙しい有



様が、まざまざと目にうかんで来る。

母が笑つて居る。大きな聲を出して呶鳴つて居る。かと思ふと、郷一が青い冷汗をすゝりながら、じろじろと土産品の風呂敷包を解く、自分の手許を視て居る、赤い顔をして、逡巡して居る時三が居る。夕方井戸端で初めて見た、隣家の豆腐屋の嫁が、反齒の、大きな顔をふいと出す。お繁は寝苦しさに幾度か枕をかへした。

種々な物象が四邊に朦々して居るうちに、ふと襖越しの話し聲が耳に入つて來た。首を擡げて、聞耳をたてゝ居ると、今度は何處ともなく、バタリバタリと淋しい響が耳に入る。『座敷だつぺいか——？』と襖の外では耳をすます氣勢ひ、響きは一定の間を置いて、憚るやうに淋しさを呟いて居る。

『座敷だ々々』

唐紙は間もなくさつと開かれた。

眞闇をわけた洋燈の光りがつと目を射ると、お繁は何の故ともなく、枕をつけて熟睡を粧つた。

『はアてな』

『何處だ——？』

すうと光りが顔を撫でゝ走つたので、細目に瞼をあけて見ると、眞黒い大きな父の姿がまづ目に入る。

裏板のない勝手が開けられたので、雨の音は稍々近く強く流れ込んで來る。

『此處だ々々』

大きな影法師は徐ろに動いて、狩獵支度の掛つて居る隅の方に蹲つた。

『大屋根から廻つて來るだな——ほうれあんなに浸み出した』

持ちあげられた三分心の洋燈は、動かされる度にほつほつと油煙をあげて居る。長押の上の漆喰に畫かれた線を見上げて居る二人の姿を、お繁はまたなく淋しく眺めやつた。

『なんにも濡れたものあ無えか』

『——無えようだね』

そこらに置いたぬぎ捨てを、母はどきりと蒲團の裾の方にあげて行つた。

『其處だけだつぺな、外にやあるまい』

入口に立つて、父は猶四邊を見廻して居る。母は黙つて傍に寝て居る郷一に枕を宛てがつて出て行つた。

『豪い雨だ!』

闇はまた追って、其聲は籠って聞えた。

置いた金盃を打つ雫は、先よりも一層哀れな音をたてる。その響が耳についてならぬ。

淋しい、寂しい、と思ふと堪らなく東京が戀しい。たゞ東京が戀しい。

お繁は幾度か寢返って長い息を吐いた。

いつまでもいつまでも奉公して居て、行末はどうするといふ考へはないけれど、このまま田舎に埋てしまふのが惜しまれてならない。

歸らう、歸らう、厭な縁談の起らぬうちに、明日にも東京に歸ってしまはふ。

と思ふといくらか胸が落ち着いて、お繁は間もなく夢路に入った。

底本…「水野仙子全集」第一卷

初出…「女子文壇」明治四十一年十二月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年十月十四日

[リンク…水野仙子ホームページ](#)